

**第4章 ペラ州における後期中等学校女子生徒の
性役割観と進路形成
—面接調査の質的分析—**

第4章 ペラ州における後期中等学校女子生徒の性役割観と進路形成 —面接調査の質的分析—

本章では、2001年9月から2004年1月まで3次にわたり断続的に実施してきた調査から、第2次面接調査を基にして、マレーシアの女性の進路形成意識について明らかにする。

第3章では、進路指導カウンセラーに対する予備調査（2001年9月）、パイロットテスト（2002年7月下旬～8月上旬）および質問紙による第1次調査（同年8月中旬～下旬）の結果を示してきた。それにより、後期中等学校生徒の進路選択において、エスニック集団別・性別の進路分化や、学校種別の進路分化の状況を確認した¹。だが、それらの進路分化をもたらす原因や背景、進路分化に対する生徒の受容や葛藤（自己同定）については十分に解明できなかった。それは、第1次調査が制限回答法による質問紙調査であったという方法上の限界にもよると言える。

それゆえ、第2次調査（2002年8月下旬～9月上旬）では面接調査を実施し、第1次調査の結果について生徒の声（言説）により補完することとする。それにより、マレーシアの後期中等学校の女子生徒が、何を動機とし、いかにして進路選択しようとしているかについて明らかにする。さらに、第3次追跡調査（follow-up survey / catch-up study、2003年12月下旬～2004年1月上旬）では、後期中等学校修了後に、女性自身が現実に選択した進路や予想される生涯設計に対して、どのように自己同定しているかについて検討する。なお、第3次面接調査の結果は、次章に示す。

第1次調査と第2次調査の対象は、後期中等学校の最終学年であるフォーム・ファイブの生徒であり、第3次調査の対象は、中等後教育段階で何らかの教育機関に進学した女性か就職した女性である。第1次調査から第3次調査までの対象は、同一の母集団から選定しているが、同一母集団を追跡して実施した2つの面接調査によって、人生の一時点の進路選択という観点からだけでなく、さらに長期間の進路形成や生涯設計という観点から、マレーシアの女性の意識や態度を検討することをねらいとした。

以下では、第2次調査の概要を示し（第1節）、調査の結果から、マレー人女子生徒（第2節）と華人女子生徒（第3節）の進路形成に及ぼす性役割観の影響について記述・説明する。さらに、エスニック集団別およびエスニック集団内部の性役割観の相違および進路形成との多様な関係性について検討する（第4節）。

第1節 第2次調査の概要

第2次調査「後期中等学校女子生徒の性役割観と進路形成」は、学校における生徒に対する面接調査と、家庭における親に対する面接調査という2つの調査から構成される（参照 第2次調査の概要）。第2次調査において、第1次調査の対象である3校の在校生から生徒44人を有意抽出し面接するが、補足的に4人の生徒に対しては家庭で集団面接（非指示的面接法）を実施する（2002年8月22日～9月6日）。第2次調査当時の対象者の年齢は、16歳から17歳前後である。さらに、第3次追跡調査では、第2次調査から各エスニック集団別の典型と考えられる7人を選び面接の対象とする（2003年12月18日～2004年1月18日）。第3次調査当時の対象者の年齢は、17歳から19歳である。第3次調査では、その対象者が後期中等学校を修了しているため、対象者の家で家族も交えて面接することとなった。

第2次調査においては、第1次質問紙調査での各自の回答に関する背景・理由について質問する。特に、性役割観をめぐる言説（結婚観・家族観も含む）（設問1, 5, 8, 11）、高等教育の意味（設問13-16）、リーダーシップと性役割観（設問19-22）、性差別（設問24-27）、職業観（設問23）について重点的に質問することによって、性役割と進路選択に関する意識を明らかにする。

先行研究の知見では、女性の進路形成に性役割観が影響を与えることが既に明らかになっている。ただし、性役割観そのものに対する価値観や、性役割観に基づく進路形成に対する先行研究の評価には偏りがあると思われる。本来、それらには、当該国や地域の文化的あるいは社会的状況が色濃く反映するため、より慎重に検討する必要がある。殊に、進路形成に対する女性自身の受容と葛藤（自己同定）について掘り下げることは重要である。それゆえ、第2次調査では、後期中等学校女子生徒の性役割観が進路形成に与える影響の、エスニック集団間およびエスニック集団内部の相違について明らかにした後に、第3次追跡調査において、青年期女性の性役割観と進路形成に対する自己同定について検討することとする。このような2段階の面接調査を実施することにより、性役割観に基づく進路形成に対するマレーシアの女性自身の意識の特徴について明らかにしたい²。

第2次調査の概要

テーマ：「後期中等学校女子生徒の性役割観と進路形成」

目的（AB共通）：進路分化を生じさせる要因について、生徒が有する性役割観（家族観・結婚観など）に関する生徒の言説から読み取り明らかにする。

第2次調査A

方法：学校における面接調査（個人、半指示的面接法）

対象：第1次調査の対象者 後期中等学校3校の生徒（フォームファイブ男女）

- ①④ ペイ・ユエン 12人
- ② タッヤ 22人
- ③ マリム・ナワール 10人 計44人

日時と場所

- ①日時：2002年8月22日（木） ペイ・ユエン進路相談室
- ②日時：2002年8月23日（金）～25日（日） タッヤ寮長室、貴賓室
- ③日時：2002年9月 2日（月）～4日（水） マリム・ナワール進路相談室
- ④日時：2004年1月 6日（火） ペイ・ユエン校区内のカフェ

第2次調査B

方法：家庭における面接調査（集団、非指示的面接法）

対象：マリム・ナワールの生徒 計4組

日時：2002年9月4日（水）～9月6日（金）

場所：マリム・ナワール校区内の各家庭

調査項目（AB共通）：

第1次調査で用いた質問紙調査の回答について詳しく口頭で質問する。

- 1) 各自が選んだ選択肢に関する背景・理由を問う。
- 2) 性役割と進路選択に関わる設問を中心に質問する。
- 3) 重点的に質問した項目；
 - a. 性役割観をめぐる言説（結婚観・家族観も含む）（設問1, 5, 8, 11）
 - b. 高等教育の意味（設問13-16）
 - c. リーダーシップと性役割観（設問19-22）
 - d. 性差別（設問24-27）
 - e. 職業観（設問23）

第2節 マレー人女子生徒の性役割観と進路形成

1. 高等教育進学の意味（設問13-16）

マレー人女子生徒は、高等教育の意味をどのように捉えているのだろうか。フォーム・ファイブあるいはフォーム・シックス修了後の進路について、性役割観を手がかりとして、

第1次調査と同様に4タイプに分けて面接した。その質問群は、「よい父親や夫になるために、フォーム・ファイブ/フォーム・シックス修了後、高等教育を受ける必要があるかどうか」、「よい母親や妻になるために、フォーム・ファイブ/フォーム・シックス修了後、高等教育を受ける必要があるかどうか」という性役割観と高等教育観についての質問と、「よい父親や夫になるために、フォーム・ファイブ/フォーム・シックス修了後、就職する必要があるかどうか」、「よい母親や妻になるために、フォーム・ファイブ/フォーム・シックス修了後、就職する必要があるかどうか」という性役割観と職業観に関する質問群である。これら一連の質問には、「男らしさ」や「女らしさ」などのジェンダー規範と、高等教育への要求との間に何らかの関係性があるのではないかという仮説を検証する意図があった。前述した第1次調査の結果から、マレー人女子生徒の意見として、男子、女子ともに家庭での役割を遂行するために高等教育に進学することが明らかになった。

第2次調査においては、マレー人女子生徒が、男性にとって高等教育を重要と考える理由として、男性が「家庭の長」としての役割を担うため、父親として模範になるためという意見が数多く挙げられた。たとえば次のような意見である（括弧内順に、学校名および第2次面接調査の番号/クラス/エスニック集団別と性別/父親および母親の職業と最終学歴、下線部筆者）。

家の主 (ketua rumah) として、物事の価値判断が的確でなければならないので、男性が高等教育を受けることは必要である。また、もし高等教育を受けないとすれば職業機会が狭まってしまい、あまりいい職業に就くことができないと思う（マリム・ナワール⑥/文系1クラス/マレー人女子/父:公務員,前期中等教育/母:主婦,非教育）。

男性にとって、「家庭の長」としての役割を担うために、高等教育も職業もともに重要と考えられている。しかしながら、女性にとっては、子どもを賢く育てることが最も重要な役割であるため、高等教育に進学した後に職業に就くかどうかは特に問わないという回答が非常に多かった。

男性には高等教育も職業も大事である。家庭の長としての役割があるからだ。子どもの模範例となるためにも。母親にも同様に高等教育は大事だ。なぜなら、母親が最も子どもたちに近い存在だから。でも、働いたら子どものよい例になることができない（タッサ⑨/宗教クラス/マレー人女子/父:行政補佐官 (Pembantu Tadbir), 大学学位/母:経理,後期中等教育）。

男性が高等教育で学び続けると、(就職した際)給料がよりよくなるから大賛成(中等教育を卒業した後すぐに就職するのは賛成しない)。女性は子どもを育てるために賢い母である必要がある。だから、女性が高等教育を受けることにも賛成。だからと言って、必ずしも女性が給料を得る必要はない(タッヤ⑧/会計クラス/マレー人女子/父:退職(pesara),後期中等教育/母:宗教教師,後期中等教育)。

つまり、マレー人女子生徒は、男性と女性のどちらにとっても高等教育進学が重要であると認識している。しかしながら、男性と女性の家庭での役割は異なることから、卒業後に職業を得るか否かについての重要度は男女で異なっている。ただし、女性が高等教育に進学すると職業機会が拡大すると考える生徒も一定程度いる。

女性が高等教育に進学することに「賛成」なのは、職業を選ぶことができるから(タッヤ⑩/宗教クラス/マレー人女子/父:非記入/母:非記入,後期中等教育)。

だが、高等教育に進学することで女性の職業機会が拡大することのメリットを挙げる意見よりも、女性が高等教育に進学すると結婚相手を探しにくくなったり、子どもの教育に力を注げなくなったりするというデメリットを挙げる意見の方が多かった。

男性が、家庭の長として、高等教育を受けることにはとても賛成する。子どもは父親を見るから、子どもの教育にとっても大事だから。女性が高等教育を受けることも賛成だが、あまり高学歴過ぎると、母親としての責任を果たすことができない。母親が役割を十分に果たすことができないといろいろと問題がおきる。主婦としての役割も仕事も、宗教で大事だと教えられている。お父さんは会計の教師になるといいと言っている。お母さんは、教師は休みが多いので好きみたい(タッヤ⑥/会計クラス/マレー人女子/父:教師,大学学位(学部)/母:教師,ディプロマ)。

タッヤの女子生徒の中には、家庭における役割を果たすため、男性が高等教育に進学することを望む生徒が多かった。それは、男性の場合、高等教育を受けることによって、職業的な地位や給料が高くなり、それは「家庭の長」として、あるいは子どもの模範として適切であると考えられるためであろう。それに対して、女性がたどるべき進路についての意見はより複雑であった。女性が高等教育に進学する目的は、妻として夫を良く助け、母として賢く子どもを育てることにあり、職業的に成功し給料を得る稼ぎ手になるかということあまり問われない。女性が職業機会を得るとしても、経済的に余裕がない場合に家計の補助的役割を担うに過ぎないと考えられる。それゆえ、女性が高等教育に進学することに概ね賛成しながらも、夫よりも教育歴が高くなることには躊躇する意見も多い。

働くことをめぐる考え方は、同じマレー人女子生徒の間でも、タッサとマリム・ナワールとは異なる。タッサの生徒は学業成績が高いため、高等教育に進学することによって職業機会が拡大し、より高い地位や給与の得られる職業に就く可能性が大変高い。ところが、タッサの女子生徒は、夫の経済力が十分であれば職業的に成功することを必ずしも望んではいない。タッサの女子生徒の回答に見られるこうした特徴は、中間層が増加し女性の主婦化が進行しつつあるマレーシアの現代的側面の一端を示しているとも言える。しかしながら、マリム・ナワールのマレー人女子生徒は、男性と女性の役割に関して、タッサと似通った考えを持っている一方、その階層は低いため、経済的理由から、修了した後に職業を得ることが切迫した問題となっている。

高等教育を受けなくても職業上の地位が高ければ、よい夫や父親として（の役割が）十分に務まると思うので、仕事の方がより重要だ。夫の仕事の悩みに（応えるのに）役立つような知識を持つために高等教育は必要。また、女性も経済的に夫を助けるために仕事をする必要もある（マリム・ナワール②/理系クラス/マレー人女子/父:公務員, スタンダード 6/母:主婦, 非教育）。

さらに、マリム・ナワールのマレー人女子生徒の中には、学業成績や経済的な状況が十分整わないために進学が困難である生徒も多い。それゆえ、成績や家族の経済状況が、進路を決定する際に重要な要因となっており、性役割観の及ぼす影響はそれらの要因よりも小さいと推測できる。

試験の結果によっては仕事をしないといけなくなる場合もあるだろうが、男子は進学した方がいい。責任が重いから。女性が高等教育を受けるのも男性と同じでとても賛成。よい生活ができるしその意味で成功できるからだ（マリム・ナワール⑨/文系 2 クラス/マレー人女子/父:運転手（ゴミ収集）, 前期中等教育/母:主婦, 初等教育）。

男性が、卒業後に高等教育に進学することにはとても賛成。家族を養う責任があるから絶対に必要。でも、試験の結果によって（結果が芳しくない場合）働かなくてはいけないのは仕方ない。女性の場合は、賛成。（でも）男性の方が女性よりも高い教育を受ける方がいいに決まっている（マリム・ナワール⑩/文系 2 クラス/マレー人女子/父:自営業 (ladang), 前期中等教育/母:主婦 (工場で働いた経験あり), 初等教育）。

また、経済的な理由により、大学に進学できないという意見もマリム・ナワールの女子生徒から多数挙げられた。このことから、マリム・ナワールのマレー人女子生徒にとって、経済的要因は進路選択の重要な要因になっていると言える。

フォーム・シックスに進み、大学に入ってから教師になることも考えられるが、そう
なると長い期間待たなければならない。大学に入ることができるかどうかははっきり
しない。だから修了後は教員養成学校に入りたい。確かに大卒の教師の方が給料はい
いが、長い期間待つ（つまり費用がかかる）ことよりは、教員養成学校に入った方が
いいと思う（マリム・ナワール⑥/文系クラス/マレー人女子/父:公務員, 前期中等教
育/母:主婦, 非教育）。

以上のように、タッサとマリム・ナワールという2つの学校のマレー人女子生徒に対し
て、フォーム・ファイブあるいはフォーム・シックスを修了した後の進路として、高等
教育に進学するか就職するかのどちらかを好むかに関する回答の中から、高等教育進学
の理由や背景についてキーワードを抽出した（表4-1）。マレー人の女子生徒は、男女とも
に高等教育に進学することを重要と考えているが、その理由は男女で異なっている。マ
レー人女子生徒に最も多い回答から、男性は家庭の長や子どもの模範となるべく、高等
教育に進学し深い教養を得て高い職業的地位に就くことが期待されていることがうか
がえる。一方、女性は賢く子育てし、男性の補助的役割を担うために高等教育に進学
することが理想とされる。このように高等教育進学を重要視することの理由が男女で
異なることは、女性の学歴が男性のそれを超えるものであってはならないという意見
からも分かる。また、就職に対する考え方も男女で異なっており、男性は高等教育の
延長上に高い給料や地位を得るという職業的成功が念頭に置かれているのに対して、
女性は高等教育に進学したとしても、高等教育卒業後の職業的成功までは想定され
ていない。そして、女性が職業に就くことが

表 4-1 マレー人女子生徒の高等教育進学の意味

回答例	男性	女性
家庭の長・家族の扶養	T① T⑱ MN⑥ T⑥ MN⑨ MN⑩	—
家族（夫）の補助		T⑮ T⑳ MN②
子どもの模範	T⑮ T⑱ T⑨ T⑳ T⑥ T⑫	
子育て		T⑱ T⑧ T⑭ T⑳
子育てや結婚への弊害		T⑥ T⑩ MN⑩
宗教的責任	T⑱	
高いキャリア・給与	T⑧ T⑪ T⑯ T⑬ T⑳ MN⑥	T⑰
イメージのよさ		T⑪
男女平等		T⑳
よりよい生活		MN⑨

注：Tはタッサ、MNはマリム・ナワールを示す。

求められるのは、どちらかといえば、父親や夫の経済状況が芳しくない場合である（参照表 4-3）。

2. 性役割観の多様性（設問 17-18）

マレー人女子生徒にとっての高等教育進学動機が、男性と女性とで異なっている理由の一つとして、性役割観が挙げられる。では、マレー人女子生徒は、性役割観が固定化されること（伝統的・固定的性役割観）に対して、どのような考えを持っているのであろうか。第1次調査において、性役割観をめぐる2つの設問（設問 17「女性は主婦として家庭で働く一方、男性は家の外で働くのに適している」および設問 18「女性はいかに高い教育を受けても最後は台所に」）に対する意見を求めたところ、マレー人女子生徒の中で、これらの性役割観に反対する意見は過半数を大きく上回っていた（設問 17 62.3%、設問 18 65.4%）。このような結果は、華人女子生徒（それぞれ 69%、75%）に比べて低いが、成人を対象とした前出のジャマイラ・アリフィン（1995）による調査結果と比べると高かった。先行研究と異なる結果が生じる背景について検討するためにも、面接調査でより詳しい意見を求めることとした。

まず、性役割に反対する意見の中で数多く挙げたのは以下のような意見である。

私の責任（tanggung jawab）は、仕事にある。家族の世話をするのは女性の幸せではあるけれども、女性が家事（のみ）をしなければいけないということはない（タッヤ④/理系クラス/マレー女子/父：教師，後期中等教育/母：看護師，後期中等教育）。

また、マレー人女子生徒が性役割に反対する意見の中に、高学歴の女性が家事のみに専心することを強く反対する意見も多い。高い学歴を得れば、その学歴を生かす職業に就くことが望ましいと考えられている。

女性が専業主婦になるのはあまり賛成しないが、女性がキャリアを得るのはよい。「高学歴の女性が最後には台所に」という昔の言い伝えみたいな状況には今はない（タッヤ⑥/会計クラス/マレー人女子/父：教師，大学学位（学部）/母：教師，ディプロマ）³。

ただし、全ての女性が、主婦になるか否かについて自由に決定できると考えている訳で

はなく、夫の経済状況に左右されるという意見もある。次の意見は、女性が高い教育を受けることとコストとのバランスについて考慮している意見であるが、上述した中間層の主婦化を生徒も意識していることが見て取れる。

夫がお金持ちであれば主婦になることも可能なので（性役割に）賛成する。女性が台所で働かなければならないのは昔、昔の話で、今は変化している。教育レベルが高いのに主婦になってしまうと、それまでに費やしたコストを捨ててしまうことにもなりかねない（マリム・ナワール⑥/文系 1 クラス/マレー人女子/父：公務員, 前期中等教育/母：主婦, 非教育）。

同様に、生徒の性役割に対する意識は経済状況に左右されるという回答も多い。以下は、男性に経済力がなく、最近の物価の上昇など社会・経済状況の変化に応じて、女性も働く必要がある場合に、女性が家事にのみ従事することには反対という意見である。

男性の経済（的な力）が十分でなければ、女性も働いた方がいいと思う。だから女性の役割観には賛成しない（タッヤ⑨/会計クラス/マレー人女子/父：警官, 後期中等教育/母：主婦, 後期中等教育）⁴。

上述の回答とは異なり、結婚した相手に経済的な余裕がありさえすれば、女性が主婦になることを望むという意見もある。たとえば次のようなものである。

家庭の状況にもよるが、余裕があれば、台所に入るのに大賛成。社会問題は母親が外で働くことが原因で起きると考えられるので、（母親は）働かない方がいいのかもしれない。（タッヤ⑳/理系クラス/マレー人女子/父：講師, PhD/母：主婦, 後期中等教育）。

子育てと職業との両立については、マレー人女子生徒も意見が分かれている。特に、子どもを出産した後には、仕事よりも子育てに専念することを望む声が多い。それは、夫の意見に従うため、あるいは祖父母や親から受け継がれてきた考え方を守ろうとするためである⁵。

昔、女性にとって教育は重要ではなかったが、今は重要だと思う。だから、高等教育を受けた女性が台所という考えには賛成しない。でも子どもがいたら仕事をやめるのがいい。私の母親がそうしたように、子どもの世話をするほうを好む（タッヤ㉑/理系クラス/マレー女子/父：教師, 大学学位/母：主婦, 後期中等学校）⁶。

その一方、女性役割を守ることを義務と考えるマレー人女子生徒の中にも、働くことと性役割の遵守とは別の問題で、両方とも矛盾なく行うことができるとみなす意見もある。

家事をすることは女性にとって重要だが、女性が家事だけをする必要も、仕事をやめる必要もない（マリム・ナワール②/理系クラス/マレー人女子/父：公務員，スタンダード6/母：主婦，非教育）。

ただし、女性が働くために家事が疎かになることを防ぐためには、家族が家事に協力する必要がある。次の意見は少数意見ではあるが、家庭の経済状況を離れて国家の経済発展を助けるために女性が働くことが重要であるとみなす意見である⁷。

性役割観には賛成しない。私たち（kita）の経済のためにも、女性も仕事をしなければならない。家事は両方がすればいい。両親もそうしていたように、両方が料理をしなければならない（タッサ②②/理系クラス/マレー人女子/父：校長，ディプロマ/母：教師，ディプロマ）。

質問紙による第1次調査においては、マレー人の女子生徒の中で、性役割観に否定的な意見を有する割合が高かった。これは、ジャマイラ・アリフィンによる調査の対象者よりも、本調査の対象者の年齢が若いことから、世代間の相違の表れであると解釈することができた。しかし、第2次面接調査におけるマレー人女子生徒の意見から、性役割観に否定的な意見が多いことには、より複雑かつ多様な背景が潜んでいるようである。たしかに、マレー人女子生徒が性役割に反対する傾向が高まりつつあることは事実であるが、結婚や出産の後には性役割を遵守すべきとする意見も少なくない。つまり、性役割観が固定的であることには反対だが、必ずしも性役割観そのものを否定するわけではない。また、性役割観を考えるより前に、深刻な家庭の経済状況があり、性役割観を遵守したくてもその余裕がないという場合もある。

3. 職業観（設問 23）

第1次調査で、男女それぞれにふさわしいと思われる職業について（設問 23）記述形式で尋ねた。回答に多く挙げた職業は、（i）現実社会で、既に男女それぞれに多い職業、（ii）現実の社会では未だ少ないが、今後女性が進出するとよいと考える職業、（iii）回

答者自身が希望する職業、(iv) 性別に関係なく、男女どちらもなりうる職業という、4つに分類できた。特に回答が多かった職業について、理由別に表 4-2 に示した。

まず、既に現実の社会で多いと考えられる職業を挙げた回答は次の通りである。

男性が、医者や弁護士に向いていると考えたのは、既に統計で多いから。講師に向いていると考えたのは地位が高いから。女性は、教師・秘書・看護師など（に向いている）。これも既にたくさんの女性が働いているから。後は、長である男性をサポートする仕事として、秘書が女性にふさわしい（マリム・ナワール⑨/文系 2 クラス/マレー人女子/父:運転手（ゴミ）, 前期中等教育/母:主婦, 初等教育）。

次に、現実の社会では未だ少ないが、今後女性が増えるとよいと考える職業であるが、この種の回答の中には、医者とりわけ産婦人科医が多い。

男性はエンジニアや軍隊(tentera)、宗教教師 (ustaz) などが合う。女性が医者になると、女性が診察に行くことが恥ずかしくなくなる。（女性には）スチュワーデスや教師もいい。男性がエンジニアになるのが適していると思うのは、スタミナがあり強いから（タッヤ⑩/宗教クラス/マレー人女子/父:非記入/母:非記入, 後期中等教育）。

エンジニアと首相、教師が男性にふさわしい。特に、首相は大きなお金を動かすから男性に適している。教師は男女ともに合うと思う。（生徒と先生の）性別が一緒の方がお互いに理解しやすい。医者が女性に合うと思うのは、最近女性の医者が少ないので、出産時などはよいと思うから。弁護士も女性向き（タッヤ⑨/宗教クラス/マレー人女子/父:行政補佐官, 大学学位/母:経理, 後期中等教育）。

第 3 に、自らが希望する職業を女性にふさわしい職業とみなす回答や、逆に女性にふさわしい職業を自ら希望する職業として答えた生徒もいる⁸。

男性は講師や医者、企業家。女性にシャリア（イスラーム法）の弁護士か教師がいいのは、自分で興味があるから（タッヤ⑩/宗教クラス/マレー人女子/父:peneroka, 後期中等教育/母:主婦, 後期中等教育）。

男性は、エンジニア、弁護士、建築士に、女性は先生、医者、講師に合う。女性は教え方がうまく、気持ちがやさしいから。ただし、女性はあるまりはつきりしない（sabab）ところがある。自分になりたいと思っている会計士は、どこでも仕事ができるからいい（タッヤ⑨/会計クラス/マレー人女子/父:警官, 後期中等教育/母:主婦, 後期中等教育）。

表 4-2 男女別ふさわしい職業（マレー人女子生徒の回答例）

選んだ理由	男性	女性
現実社会で既に多い職業	エンジニア 医師 建築士 弁護士 軍人 宗教教師 (ustaz) ウラマ (Ulama/ Penasihat Agama) 首相 指導者 経営者 ビジネス 会計士	教師 看護師 秘書 スチュワーデス 医者 経理 会計 料理人
現実の社会では少ないが 今後進出が望まれる職業	—	医者 (産婦人科医) 弁護士
回答者自身が 希望する職業	—	薬剤師 シャリアの弁護士 医者 会計士 ビジネス
男女どちらにも ふさわしい職業	教師	

逆に、女性に向く職業でないことは理解しているにもかかわらず、将来希望する職業として挙げる意見もあった。

男性は指導者、ビジネス、建築士に、女性は医師、デザイナー、秘書に適していると思うが、自分はビジネスに挑戦してみたい。実際に女性に医者が多くないことは知っているが、(自分は) 人に愛しみ優しくする (sayang) ことに長けているから、女性には医者が合うと思う (タッヤ⑦/会計クラス/マレー人女子/父:地方公務員, 後期中等教育/母:行政補佐官, 後期中等教育)。

第4に、男性と女性のそれぞれの特性を根拠にする回答は最も多かった。

弁護士は男女関係なくできると思うが、女性には医者や教師や看護師が合う。男性の方が勇敢で、女性が感情的だから (タッヤ⑤/理系クラス/マレー人女子/父:建設会社経営, ディプロマ/母:行政補佐官, 非記入)。

男性は勇敢で女性はソフトだから、男性はエンジニア、医者、建築家、弁護士、女性は教師、社長、秘書に向いている (タッヤ⑭/宗教クラス/マレー人女子/父:教師, 大学学位/母:教師, ディプロマ)。

弁護士は決断する勇氣、ビジネスはより多くの時間を必要とするので男性に適している。一方、女性はまだ難しくない職業である講師や、やさしく患者を労わる医者

向く。(自分が希望する) 会計の仕事は簡単な仕事なので、男女とも向く (マリム・ナワール②/理系クラス/マレー人女子/父:公務員, スタンダード 6, 母:主婦, 非教育)。

男女の特性に加えて、男女の役割観から次のように答えた生徒もいる。

男性が警官と軍人に合うと思うのは、男性はちょっと粗雑なところがあるから。女性は料理がうまいから、主婦と料理人に向いている。男の人が料理したら恥ずかしい。教師には男女とも適していると思う (タッサ⑩/会計クラス/マレー人女子/父:地方公務員, 前期中等教育/母:主婦, 前期中等教育)。

このようにマレー人女子生徒が、男女それぞれにふさわしいとみなす職業は多様であるが、多様な選択の中にも一定の傾向がある。たとえば、男性は、力強く困難にも耐えられるため、エンジニア・建築家・軍隊・指導者などに向くと考えられる一方、あまり活動的ではなく気持ちがやさしい女性は、教師・秘書・看護師などが適していると考えられた。これらの回答は、第1次調査でリーダーシップについて尋ねた設問群への回答とも類似しており、リーダーシップをとりうる男性像と、補助的役割に適した女性像に基づき導かれた回答であると言える。また、多くのマレー人女子生徒の中には、現実社会で既に女性が多い職業を認め、それを追認する形で自らの職業を選択しようとする生徒がいる一方、現実には女性が少ないことを理解した上で、その現実に対抗する形で女性が少ない職業を選ぼうとする生徒もいる。

第3節 華人女子生徒の性役割観と進路形成

1. 高等教育進学の意味 (設問 13-16)

マレー人女子生徒は、家庭における性役割を担うために高等教育が重要であると考えていた。それに対して、華人女子生徒は、教育と性役割との関係は密接ではない上に、高等教育の意味に男女差を認めていない。そのため、高等教育進学の意味と性役割との関連性を問う設問群 (設問 13-16) そのものが、華人女子生徒にとっては意味をなさなかったと言える⁹。たとえば、次のような意見である。

夫や父親になるために、教育は関係ない。自分の場合は、妻や母親になるためにではなく、興味で（学校を）選ぶ（ペイ・ユエン①/理系クラス/華人女子/父：トラック運転手, スタンダード6/母：主婦, 前期中等教育）。

ただし、華人女子生徒の中には、自らの教育歴が高い場合に、夫にも同等の教育を受けてほしいと望む意見や、マレー人女子生徒と同様に男女のバランスを考えて男性が高等教育を受けることを重視する意見もある。華人女子生徒の回答は、自分自身の教育歴を基準にしているが、マレー人女子生徒の回答は、男性の教育歴を基準にする意見が多かった。

夫を選ぶのであれば、自分と同じように高等教育を受けた男性の方がいい。男性は自分と同等の教育を受けてほしい（ペイ・ユエン②/理系クラス/華人女子/父：自動車販売, 前期中等学校/母：主婦, 前期中等学校）。

華人女子生徒の回答には、男性にとっても女性にとっても高等教育に進学することが、職業機会の拡大だけでなく生活レベルの向上につながるという意見も多い。

教育レベルが高いと経済的に安定し生活が向上するので、男性も女性も高等教育を受けた方がいい（ペイ・ユエン③/理系クラス/華人女子/父：商売, 前期中等教育/母：無業, スタンダード6）。

ただし、華人女子生徒の意見の中には、高等教育に進学することで職業機会が広がると理解していても、男性とのバランスに留意した意見もある。

男性が高等教育を受けることは賛成。知識を持つとあらゆる問題を解決しやすくなるから。高等教育を受けないと、仕事でも何でもあまりたくさん選択肢がなくなってしまう。女性の場合も高等教育を受けることは賛成だが、男性ほど高い教育でなくてもよい。男性は生来エゴが強いので、（男性とのバランスを考えて）女性は必ずしも高等教育を受ける必要もない。でも、高等教育を受けないと、職業の選択肢が、たとえばウェイトレスなど限られてしまうので、あまり賛成はしない（マリム・ナワール③/理系クラス/華人女子/父：家の修理工, 前期中等教育/母：主婦, スタンダード6）。

また、華人女子生徒の親や祖父母の世代が生きた時代には、女性が高等教育を受けることが難しかったが、現在は変化していると述べる者も少なくなかった。このことは、マレー人女子生徒とは異なる特徴である。華人女子生徒は、親や祖父母の世代では女性が高等教育に進学するのが難しかったことを知りつつも、現代では女性が自立するために高等教育に進学することが重要であると主張する。

男子の方はあまり分からないけれど、勉強することが、卒業後働くことよりも大事だと思う。女子の方は、勉強がとても大事。昔、女性は勉強しなくても大丈夫だったけれど、今の女性はそれではだめ（ペイ・ユエン⑩/理系クラス/華人女子/父:商店経営, 前期中等教育/母:商店経営, 前期中等教育）。

男性も女性も、高等教育まで勉強を続ける方が重要。その理由は、女性も「独立」する必要があるからだ（ペイ・ユエン⑤/理系クラス/華人女子/父:労働者, 前期中等教育/母:主婦, 前期中等教育）。

華人女子生徒を対象とした面接結果から、高等教育進学の意味についてまとめると表 4-3 の通りとなる。華人女子生徒にとって、家庭での役割を果たすことと高等教育に進学することとが、マレー人女子生徒ほど強い相関関係にはなかった。表 4-1 において、マレー人女子生徒に頻出した回答は、家庭における役割に関連する項目であったのに対して、華人女子生徒に頻出した回答は、高いキャリアや給与、興味・関心などの項目である。

つまり、華人女子生徒は、家庭における女性の役割を遂行するためというよりも、職業的な選択肢の幅を広げたり経済的に安定したりすることによって自立するため、あるいは自分自身の興味や関心に従うために、高等教育へ進学しようとしている。マレー人女子生徒が、男女ともに高等教育に進学することを重要とみなしながらも、卒業後の職業的成功については男女では異なる意見を持っていたのに対して、華人女子生徒は、高等教育卒業後の職業的成功についてはほとんど男女差がない。

表 4-3 華人女子生徒の高等教育進学の意味

回答例	男性	女性
子育てや結婚への弊害	PY②	
高いキャリア・給与	PY③	MN③ PY③ PY⑤
自らの興味	PY①	PY① PY②
高い教養	MN③	PY⑨
性役割とは無関係	PY⑨ PY⑩ PY⑧	PY⑩ PY⑧

註：PY はペイ・ユエン、MN はマリム・ナワールを示す。

2. 性役割観の多様性（設問 17-18）

上述した通り、華人の女子生徒が高等教育進学に求める意義は、マレー人の女子生徒とは大きく異なる。エスニック集団別の相違の根拠について、マレー人女子生徒と華人女子生徒の性役割観が大きく異なることが影響しているのではないか。概して、華人女子生徒は、性役割観を守るのは昔の世代の話で、現代に生きる自分たちは、ことさらに性役割を守ることに固執する必要はないと考える。そして、能力や力があれば、性別に関係なく様々な機会を得ることができるとも考えている。

たとえば、次の意見は、華人女子生徒に最も多かった意見である。

性役割観には「反対」。女性も男性と同様に働くことはできる。だから、もし夫が仕事をやめるように言っても続けたい (マリム・ナワール⑦/文系 1 クラス/父:鉄工場労働者(kilang besi), スタンダード 6/母:主婦, 非教育)。

上記の華人女子生徒の回答は、マレー人女子生徒からはあまり挙がらなかった回答である。また、性役割に対する世代間ギャップが顕著であることを華人女子生徒自身が自覚している点は興味深い。

テレビを見たり料理したりするだけではつまらない。一般的に、このような考え方(性別役割観)は昔の話に過ぎないし、現在自分たちの世代ではこういう考え方は随分減っている (ペイ・ユエン①/理系クラス, 華人女子, 父:トラック運転手, スタンダード 6, 母:主婦, 前期中等教育)。

若い世代は、力があれば家庭だけでなく外で働くことも問題にはならないので、性役割観には全く賛成しない (ペイ・ユエン②/理系クラス/華人女子/父:自動車販売, 前期中等学校/母:主婦, 前期中等学校)。

加えて、性役割観をめぐる、両親との世代間のギャップを日常的に感じてきたという回答もある。

必ずしも性役割がよいとは限らない。女性にも力があれば、主婦にだけなる必要はない。でも、両親は時々「女の子は本を読む必要ないよ (tak payah baca)」と言うことがある (ペイ・ユエン③/理系クラス/華人女子/父:商売, 前期中等教育/母:無業, スタンダード 6)。

華人女子生徒は、家事や子育てが女性にとって大事な仕事であるとは認めながら、女性

の役割はそれらだけではなく、夫とそれらを分担していこうと考えているようである。

女性も主婦だけではなく、家の外の人と交流することが大切だと思う。もちろん台所で家事をするのも女性の仕事としていいと思うが、もし本人が望むなら (suka-hati)、男性も女性も外で働くことが可能だと考える (ペイ・ユエン⑤/理系クラス/華人女子/父:労働者, 前期中等教育/母:主婦, 前期中等教育)。

華人女子生徒の中でも、マリム・ナワールの生徒の中には、女性が働いた方が経済的に豊かになると答えた生徒もいた。同様の回答は、マリム・ナワールのマレー人女子生徒からも聞くことができた。

女性も経済的に豊かになるために外で働いた方がいい。せっかく高い知識を得ても、主婦になってしまうと機会が広がらない (マリム・ナワール③/理系2クラス/華人女子/父:家の修理工, 前期中等教育/母:主婦, スタンダード6)。

以上の調査結果から、華人女子生徒の大半は固定的性役割には反対しており、性役割観に基づき高等教育に進学するということはあまりない。また、華人女子生徒にとって、固定的性役割は、あくまでも伝統的性役割であるとも言い換えることができる。それは、女性だけが家事の役割を担ってきたのは上の世代の話とみなしているからである。現代の華人女子生徒は、性役割観に対する反発が強い。マレー人女子生徒の中でも、性役割が固定化することには反対する意見も増えつつあるが、それでも、結婚や出産の後には性役割を遵守しようとする意見は多い。それに対して、華人女子生徒には、進路形成のどの時点においても、マレー人女子生徒のような性役割観に基づく進路形成という考え方そのものがなかった。

3. 職業観 (設問 23)

さらに、マレー人女子生徒は、男女それぞれにふさわしい職業を積極的に回答していたのに対して、華人女子生徒には性別により適した職業はないと断定する回答が多い。そのため、設問 23 への回答数そのものがあまり多くない。たとえば、次の意見に華人女子の職業観が端的に表れている。

男性も女性も同じ地位だと思う。両親は分からないけれど、きっと私の姉たちも私と

同じようなことを言うと思う。だから、男性と女性にそれぞれ合う職業があるとは思わない。男女どちらでも何でもできると思う。ただ、たしかに華人の家族の中には、男子が家族の中で大事にされて家長になるという風潮は強い。でも、自分はそういうのは好まない（ペイ・ユエン⑧/理系クラス/華人女子/父:教師, 大学/母:教師, 後期中等教育）。

このような意見が華人女子生徒に特有の意見であると言える。だが、男性と女性に適した職業があると答える、マレー人女子生徒の回答に似通った意見がごく少数ある。

医者を観察する機会があったが、性別にかかわらず働くことができるという印象を受けた。教師を選んだのは、女性の方がより他人の世話をする (sayang) 能力に長けているし、より我慢強い (patient) と思うからだ。男性が教師になると、給料が必ずしも高くないので、家族を養うのには足りないだろう。女性の場合は、(通常半日で仕事が終わるので) 家族の世話をすることができるので、女性に適していると言える。会計係あるいは会計士は、お金を取り扱うことに女性の方が適していると考えた。たとえば、家族で家計簿を預かるのは通常女性であることから想像できる（ペイ・ユエン①/理系クラス/華人女子/父:トラック運転手, スタンダード 6/母:主婦, 前期中等教育）。

また、性役割に基づく職業観を持つ華人女子生徒は、医者は男性、看護師は女性という組み合わせを好んだ。

医者が男性で看護師が女性という組み合わせが好き。先生はたくさん休みがあるし難しい職業だから女性に向いている（マリム・ナワール③/理系クラス/華人女子/父:家の修理工, 前期中等教育/母:主婦, スタンダード 6）。

表 4-4 男女別ふさわしい職業（華人女子生徒の回答例）

選んだ理由	男性	女性
既に現実社会で多い職業	弁護士 警官 軍隊 医者	アーティスト 経理 看護師 教師 薬剤師
男女どちらにもふさわしい職業	全て	

以上の通り、将来就きたい職業を質問した設問（設問 8）に対して、華人女子生徒から、薬剤師など、女性に適した職業も挙げられた。しかしながら、マレー人女子生徒は、男女

の特性や役割観に基づく職業観を持つため、男女別にふさわしい職業を数多く挙げていたのに対して、概して、華人女子生徒は、ほとんどの職種が男女のどちらにもふさわしいと考えている。このことから、エスニック集団別で職業観も大きく異なると言える(表 4-4)。

第4節 まとめ

本章では、後期中等学校フォーム・ファイブ時の女子生徒を対象とする第2次調査の結果を通じて、性役割観が進路形成に及ぼす影響が、マレー人女子生徒と華人女子生徒というエスニック集団別で異なるとともに、同じエスニック集団内部でも学校種別により異なることを明らかにした。以下、女子生徒の性役割観と進路形成の多様な関係の特徴について4点挙げることにする。

第1に、女子生徒の性役割観に対する意見は複雑かつ多様であった。第1次調査において、女子生徒が固定的性役割観に反対する傾向が強く見られることが明らかになった。ところが、第2次調査においては、華人女子生徒から固定的性役割観を否定する意見は多数聞かれたものの、マレー人女子生徒からは固定的性役割観を尊重する意見が多く挙げられた。加えて、マレー人女子生徒からは、性役割観よりも、経済状況に鑑みた進路選択をしなければならないという意見が挙がることも少なくなかった。一方、華人女子生徒は、性役割観に対する意識や態度が世代間で大きく異なる点を強調していた。

第2に、女子生徒の性役割観と高等教育観はエスニック集団間で異なっていた。マレー人女子生徒は、女性(母親・妻)として性役割に忠実であろうとして高等教育に進学するのに対して、華人女子生徒は、自らの興味・関心や、自己実現、自立のために高等教育に進学しようとしており、家庭での性役割観を果たすために高等教育に進学するという、性役割に基づく進路形成には賛成しない。マレー人と華人の男女を対象とする第1次調査の結果から、女性が「よい妻」や「よい母親」になるために高等教育進学を重要視するという回答が、全体では64.9%(190人)にも上ることが明らかにされたことから、性役割観に基づく高等教育観を肯定する生徒が多いと思われた¹⁰。しかしながら、マレー人女子生徒と華人女子生徒を対象を絞った第2次面接調査からは、性役割観と進路形成に関するエスニック集団別の相違が鮮明になった。

第3に、女子生徒の性役割観と職業観にもエスニック集団間に相違が見られた。マレー

人女子生徒が、教師や看護師という職業を負担が少なく性役割を守りやすい「女性に適する」職業とみなす一方、華人女子生徒は、職業選択に性役割はほとんど関係ないと考えていた。マレー人女子生徒の回答の中には、男性は「家庭の長」としての役割を果たすため、もしくは父親として子どもの模範となるために高等教育に進学し、よりよい職業機会を得るべきであるという意見が多かった。そして、女性にも高等教育が重要であるというマレー人女子生徒の意見も多く挙げたが、高等教育進学後に女性が職業機会を得ることには固執しないという意見も多数を占めたことは興味深い。加えて、自らがなりたい職業と、男女それぞれにふさわしい職業を問う第1次調査の設問から、多くのマレー人女子生徒(特にマリム・ナワールのマレー人女子生徒)が、教師や看護師など「女性に適する」職業に将来就きたいと考えていた。ところが、第2次調査の結果も加味すると、マレー人女子生徒が教師を希望するのは、教師が性役割を遵守しやすく女性にとって負担が少ないと考えるためである。このように、マレー人女子生徒は、男女には異なった特性や役割があると考えられるからこそ、男女それぞれに適する職業があるとみなすと言える。ただし、男女の特性に基づき職業を希望するマレー人女子生徒と、男女の特性を認めた上でそれには一致しない職業を志すマレー人女子生徒とが各々一定程度存在する。

これらの3点に関するマレー人女子生徒と華人女子生徒の意見について、表4-5に比較対比しつつ示した。各エスニック集団別の特性の一例として、マレー人女子生徒には、「家の主(ketua rumah)として物事の価値判断が的確であるために、男性が高等教育に進学する必要がある。もし高等教育を受けないと職業機会が狭まってしまい、あまりいい職業に就くことができない」¹¹という回答と、「(前略)母親が最も子どもたちに近い存在だから、母親にも高等教育は大事。でも母親が働いたら子どものよい例になることができない」¹²という、女性にとって子どもを賢く育てることこそが重要な役割であるとみなす回答が典型的であった。これらマレー人女子生徒の意見から、女性が高等教育に進学することは大事であるが、必ずしも就職して高い社会的・経済的地位を得る必要はなく、それどころか女性が就職することは、子どもの教育にマイナスになるとさえ危惧している。つまり、男性(父親・夫)として女性(母親・妻)として賢くあろうとするために、高等教育に進学すべきという共通した意見は、その後の職業に対する考え方には反映されていないと言える。なお、マレー人同士が結婚する場合、男性よりも女性の方が高学歴であることは好ま

表 4-5 女子生徒の性役割観と進路形成—エスニック集団間対比—

	マレー人女子生徒	華人女子生徒
性役割観	<ul style="list-style-type: none"> 性役割は大変重要である。 女性の可能性は、妻として母としての役割だけではなく、よりよい職業を得ることにもある。 	<ul style="list-style-type: none"> 女性が性役割を守るべきであったのは、祖母や母の代までの話である。 これからの時代の女性は、仕事を続けるべきである。 夫との家事分担を厭わない。
性役割観と高等教育観	<p>男性に対して</p> <ul style="list-style-type: none"> 男性は、家庭の長としての役目を果たすために高等教育に進学すべき。 <p>女性に対して</p> <ul style="list-style-type: none"> 女性は、よき妻、よき母になるために、高等教育に進学するのがよい。 	<p>男女ともに</p> <ul style="list-style-type: none"> 男女問わず、高等教育の意味と家庭での役割との間に相関関係はない。 男女ともに、職業的成功、自己実現、自立のために、高等教育への進学が重要である。
結婚観	<ul style="list-style-type: none"> 女性の方が高い教育歴を持つことを、あまり好まない。 	<ul style="list-style-type: none"> 男性の方が低い学歴を持つことを、あまり好まない。
職業観	<ul style="list-style-type: none"> 性別に応じて、ふさわしい職業はある。 女性が選ぶべき職業は、女性の家庭における役割の遂行を阻まない程度や範囲であるべきである。 家族の経済状況に応じて、女性でも職を得た方がよい場合もある。 	<ul style="list-style-type: none"> 職業と性別とは相関関係にない。 自らの興味・関心に応じて、職業選択するべきである。

出所：調査結果より筆者作成。

れないという意見も挙げた。

一方、華人女子生徒は、女性が家庭における役割を果たすべきであったのは祖母や母の代までの話であり、これからの時代には、女性でも仕事を続けるべきであると主張する。そして、マレー人女子生徒とは異なり、家庭における父親・母親役割や夫・妻役割と、高等教育進学との関係性を認めなかった¹³。また、華人女子生徒から、性役割観は既に過去の古い考え方であり、現代を生きる女性が自立していくためには、高等教育に進学するべきであるという意見が多く挙げられた。このことから、華人女子生徒にとって、職業的な

成功や自己実現のために高等教育に進学するという発想は、非常に理解しやすい価値観であると言える。その一方、家庭での性役割観を果たすために高等教育に進学するという、マレー人女子生徒に特有の発想は、華人女子生徒にとっては幾分理解しにくい価値観であった。華人女子生徒の代表例として、「夫や父親になるために教育は関係ない。自分の場合も妻や母親になるためにではなく、興味で選ぶ」¹⁴という意見が挙げられる。華人女子生徒は、性別に関係なく高等教育に進学することが、その後の職業機会の拡大や生活レベルの向上につながると考えている。

ただし、華人女子生徒にも、女性の教育歴が高い場合には、夫にも同等の教育を受けることを望んだり、男女のバランスを考えて、女性よりも男性の方が高等教育に進学することを優先したりするという、マレー人女子生徒と類似する意見が少数あった¹⁵。だが、概して、華人女子生徒は進路選択に性別はほとんど関係ないとみなしており、高等教育選択や職業選択に著しい男女差は認められなかった。そして、固定的性役割をそのまま受け入れた上で進路選択するというより、現実社会に未だ存在する固定的・伝統的性役割に葛藤を伴いながら進路選択しようとしていた。

第4に、性役割観が高等教育選択や職業選択などの進路形成に及ぼす影響は、エスニック集団間だけでなく、エスニック集団内部でも異なっていた。本調査において顕著であったのは学校種別の相違であり、殊に、普通学校マリム・ナワールと州立宗教学校タッヤにおけるマレー人女子生徒の相違であった。タッヤのマレー人女子生徒は、比較的学業達成度が高く、公立大学を主とする高等教育進学が選択すべき進路であり、大学進学することによって職業機会が拡大し地位や給与がよりよくなる可能性があると考えていた。こうした意見から、先行研究で示されたほどに、マレー人女子生徒が女性に適する職業ばかりを希望するのではなく、社会的に地位や権威ある職業に果敢に挑戦しようとしていることが示される。ただし、タッヤのマレー人女子生徒から、夫が経済的に豊かであれば、自身の職業的成功を望まないという回答が多く挙げられたことから、中間層の増加により女性の主婦化が進行しつつあるマレーシアの現代的側面の一端を示しているとも言えた。それに対して、マリム・ナワールのマレー人女子生徒の出身階層は低く、後期中等学校を修了した後、よりよい職業機会を得ることが切迫した問題となるため、「経済的に夫を助けるために仕事することも大事」¹⁶という意見も少なくなかった。さらに、マリム・ナワールのマレー人女子生徒の中には、家族の階層や経済状況が原因となり高等教育への進学が困難になる生徒も多かった¹⁷。

以上のことから、第1次調査では、マレー人女子生徒、華人女子生徒ともに、固定的性役割に反対する意見が多いという共通点が見出されたが、第2次調査では、性役割観が進路形成に及ぼす影響は必ずしも小さくない上に、エスニック集団別でその影響の仕方が異なることが示された。エスニック集団別だけでなくエスニック集団内部でも、性役割観の進路選択に及ぼす影響が複雑かつ多様である上に、それらにおける性役割観の影響の仕方は、高等教育選択と職業選択の場面で異なっていた。

では、マレー人女子生徒と華人女子生徒が、後期中等学校修了後にそれぞれ実際に歩むことになった進路を、どのように受容したり葛藤したりするのであろうか。先行研究で指摘されている通り、華人女子生徒の方が、ブミプトラ政策の影響を受けて進路選択に伴う葛藤が大きいのであろうか。また、ブミプトラ政策により優先的に教育機会を供与され、それゆえ「恵まれている」と考えられがちであったマレー人女子生徒には葛藤がないのであろうか。次章では、後期中等学校を修了した後の女性に対して、第3次追跡面接調査を実施し、マレーシアの女性の進路形成と自己同定の一端を明らかにしたい。

註

- 1 エスニック集団別の進路分化と男女別の進路分化について、それぞれ「エスニック・トラック」と「ジェンダー・トラック」と呼ぶことについては、第3章で既に論じた。詳細は、鴨川明子(2003)、「後期中等教育段階における生徒の性役割観と進路選択—マレーシア・ペラ州の実地調査より—」日本比較教育学会『比較教育学研究』第29号、pp.152-169. を参照されたい。
- 2 2段階の面接調査を試みた理由の一つは、性役割観が幼児期から少年・少女期、青年期と、年齢を重ねるごとにボトム・アップ式に形成されるためであり、年齢に応じて自らの進路の現実に対する自己同定のありようにも変化が見られるためである。
- 3 引用した生徒の声の他に、「女性は何でもしたいことができるので、役割観には賛成しない、特に高学歴の女性が・・・にはまったく賛成しない(タッヤ⑩/会計クラス/マレー人女子/父:地方公務員,前期中等教育/母:主婦,前期中等教育)」や、「男女の役割分担には『賛成しない』。女性が高等教育を受けた後は働かなくてはならない。もちろんそれが義務だから、必ずしも『台所に入らなくてもいい』(タッヤ⑬/宗教クラス/マレー人女子/父 peneroka, 後期中等教育/母:主婦, 後期中等教育)」などの声も挙げた。
- 4 「性役割観には反対。生活(kehidupan)や、経済面(kewangan・ekonomi)から考えても女性も働いた方がいい(タッヤ⑬/宗教クラス/マレー人女子/父:退職,後期中等教育/母:裁縫職人,スタンダード6)」、「最近は物が高くなっている所以女性も働いた方がいいかもしれない。だから性役割観に対しては分からない(タッヤ⑭/宗教クラス/父:行政補佐官,大学学位/母:経理,後期中等教育)」という意見も挙げた。
- 5 「性役割観には『賛成しない』。でも、もし男性が仕事をやめろと言うのならやめるが、まずは議論をする(タッヤ⑭/宗教クラス/マレー人女子/父:教師,大学学位/母:教師,ディプロマ)」などの意見も挙げられた。

-
- 6 「性別役割観に対しては、必ずしもそうとは言えない。女性は仕事もすることができる。ただ、子どもを育てることはしなければならない。『最後は台所に…』という質問は、夫も料理をすることができるので「賛成しない」(タッサ⑫/宗教クラス/マレー人女子/父:公衆衛生補助員,後期中等教育/母:主婦,後期中等教育)」などの意見もある。
 - 7 その他に、女性が家庭の外で働くために、家事を男女で分担する必要があると答える生徒もいた。たとえば、「女性が外で働くのは問題ない。協力して (persatuan) 家事をするのがいい (タッサ⑤/理系クラス/マレー人女子/父:建設会社経営,ディプロマ/母:行政補佐官,非記入)」という意見がそれである。
 - 8 回答者自身が希望する職業 (設問 7 や 8) に対する回答と理由の説明から補足すると、「会計学を選びたいと思っているのは、その後の『職業機会』が広がるとお母さんがいつも言っているから。お婆の影響もあって、先生もいい。地位が高いので会計士になりたい (タッサ⑨/会計クラス/マレー人女子/父:警官,後期中等教育/母:主婦,後期中等教育)」という希望や、「シャリア (Syariah) の弁護士になりたい。弁護士は女性の仕事だと思っているから (タッサ⑭/宗教クラス/マレー人女子/宗教クラス/父:教師,大学学位/母:教師,ディプロマ)」、「シャリアの弁護士になりたい。宗教を専攻しているから興味があるのと、給料が高いのでいいと思う (タッサ⑰/宗教クラス/マレー人女子/父:行政補佐官,大学学位/母:経理,後期中等教育)」などの意見が挙げられた。
 - 9 たとえば、「夫に高い教育は必要だけれど、その人のふるまいこそがもっと大事だ。もし、大学に行ってもあんまりやさしくない男性と、大学には行っていないけれど心の優しい男性の 2 人がいるとすれば、後者の方がいいに決まっている。女の人だって同じだ (ペイ・ユエン⑩/理系クラス/華人女子/父:教師,後期中等教育/母:教師,後期中等教育)」という意見も挙げられた。
 - 10 また、第 1 次調査において、男性が「よい夫」や「よい父親」になるために、高等教育に進学することを重要視するという回答は、全体の 70.3% (206 人) に上る。
 - 11 A さん、マリム・ナワール (文系) マレー人女性、父は学校の用務員 (前期中等教育、母は主婦 (非教育)。マリム・ナワール中学校修了後、マラ技術学校の職業コースに進む。
 - 12 B さん、タッサ (宗教) マレー人女性、父は行政補佐官 (大学学位)、母は経理 (後期中等教育)。
 - 13 たとえば、「テレビを見たり、料理したりするだけではつまらない。一般的に、このような考え方 (性別役割観) は昔の話に過ぎないし、現在自分たちの世代ではこういう考え方は随分減っている (E さん、ペイ・ユエン (理系) 華人女性、父はトラック運転手 (スタンダード・シックス)、母は主婦 (前期中等教育)」という意見である。
 - 14 同上 E さんの回答。
 - 15 たとえば、「夫を選ぶのであれば、自分と同じように高等教育を受けた男性の方がいい。自分と同等であってほしい (F さん、ペイ・ユエン (理系) 華人女性、父は自動車販売 (前期中等学校)、母は主婦 (前期中等学校))」という意見が挙げられた。
 - 16 C さん、マリム・ナワール (理系) マレー人女性、父は公務員 (スタンダード・シックス)、母は主婦 (非教育)。本文に引用したコメントの前に、「(前略) 夫の仕事の悩みに答えられるような知識を持つため」として、高等教育進学を推奨する意見も述べている。
 - 17 たとえば、「男性が修了後に高等教育を受けるのは、家族を養う責任があるから絶対に必要。試験の結果によって働かざるをえないこともあるが。男性の方が女性よりも高い教育を受ける方がいいに決まっている (D さん、マリム・ナワール (文系)、マレー人女性、父は自営業 (ladang) (前期中等教育)、母は主婦 (初等教育)」という意見もある。
